

勝海舟とキリスト教

竹 中 正 夫

1. はじめに
2. 水平線をこえるもの
3. 讚美歌に寄せるおもい
4. キリスト教の容認
5. 五つの聖書のことばの揮毫
6. 勝海舟をめぐるキリスト者たち——津田仙、富田鉄之助、新島襄
7. 伝記、文書の編集者たち——巖本善治、徳富蘇峰、山路愛山、戸川残花
8. 外人のみた勝海舟——ホイットニー一家の人びととE.W.クラーク
9. むすびにかえて

1. はじめに

『勝海舟』（日本の名著32巻、中央公論社）の編者、江藤淳氏は、その解説に「剣と禅とキリスト教」という題をかかげ、この三者が勝海舟の思想的背景を形成していたことを指摘して、こうのべている。

海舟の精神構造とキリスト教との関係は、今後の重要な研究課題となるにちがいない。¹⁾

本論文は、その問いかけにこたえて、勝海舟とキリスト教の関係に光をあてようとする一つの試みである。なお、筆者はさきに、「勝海舟と新島襄」について小論を発表しているので、その部分の叙述は、当該論文を参照されたい。²⁾

作家司馬遼太郎は、『明治という国家』において、幕末からの変革期に、党派を越えて国民という思想をもっていた人物として、勝海舟に注目し、その背後に長崎海軍伝習所時代にカッテンディケと出あったことに注目している。

幕末のいわゆる志士のなかで、明治の革命後の青写真、国家の設計図をもった人は坂本龍馬だけだったろうと思いますが、それは勝という触媒によってできあがって行ったものでしょう。さらにいえば、カッテンディーケが勝にとっての触媒だった。それが龍馬にうつされてゆく³⁾

そこで、長崎海軍伝習所時代における勝海舟とカッテンディーケとの出会いからわれわれの探索をはじめてみたいと思う。

2. 水平線をこえるもの

勝海舟は、いち早くオランダ語を学び、変動している世界情勢に目をひらき、「海防に関する意見書」(1853)を提出していた。1855(安政2)年に幕府が長崎に設けた海軍伝習所に自ら入所し、約4年間、彼は研鑽に励んだ。幕府や各藩から派遣された延200名近い伝習生のなかで、勝海舟は艦長役をたし、伝習生たちの信望もあつく、その代表をつとめていた。長崎海軍伝習所の所長(目付取締)は木村図書(喜毅)で、彼は、勝海舟より八歳下であり、かつ、オランダ語は出来ず、海洋航海の経験も乏しい指導者であった。これに比べて、勝海舟は、困苦にめげずにしたたかに、はいあがって来た男で、二代目所長である木村の着任以前にすでに二年間、長崎海軍伝習所で訓練をうけていた。すべてを規則によって取締るところに、自分の権威の基盤をおいた木村所長と、自由闊達に振舞い、本質的に物事を果そうとした勝海舟との間に軋轢のあったことは想像に難くない。勝海舟はこう述懐している。

長崎の伝習所へいるころなど、始終目付とその下役とが日々取締るのだ。それで此方などは、蘭人と話しをする時は、その下役が横に付いて来てい

ると、ひどく目付の悪口など言うてやる。通詞がまごまごして訳さないと、訳さなければ、己が片言で言うてしまうぞとおどかしてやるのさ。だから、今日はだれだ、マタ勝かというて、恐れてしまいには附いて来なかったよ。木村が奉行の時、「航海のけいこが、そう短かくて直に帰って来るようでは、宜しくない。もっと遠くまで行ったらドウダ」というから「ソウですか、それではそう致しましょう」と言っ、て、木村を乗せて、今日は遠くまで行くのだと言っ、て、^{ひと}非道い目に合せてやった。風が立っ、て、波が荒いものだから、木村はココはどこだ。もう帰っ、てはと言うから、どうしてどうして、ここはまだ天草から五、六里です、これからズット向うまで行くのですと言っ、たら、モウヨイモウヨイと言っ、て、大層へどをついたよ⁴⁾

この文章のなかには、権威主義的な格式ばった上司に対して、ユーモアとしたたかさをもって自由に処している勝海舟の片鱗をみるおもしろいがある。

長崎海軍伝習所の教師団の団長がリッター・ホイセン・ファン・カッテンディーケ(W. J. H. van Kattendijke, 1816～1866)であった。彼は、前任者ベルス・レイケン(G. C. C. Pels Rijcken)が安政4年に帰国したとき、入替りに、オランダで建造された咸臨丸(ヤパン号)とともに長崎に來任した。レイケンは帰国後海軍中将にまで進み、海軍大臣をつめるなど、可成りの人物であったと思われるが、残念ながら記録を残していないので彼が日本に対してどのような印象をもったのか知り得ない。それに比して、カッテンディーケは、『長崎海軍伝習所の日々』という日記の抄本を出版している。われわれは、そのおかげで、カッテンディーケの人物像、とくに彼のキリスト教信仰や勝海舟への影響などについて知る手がかりを得ることができる。カッテンディーケは同書のはしがきにおいて、二ヶ年半にわたる長崎滞在において日本の若者たちと深い交りをもったことを回想してつぎのようにのべている。

我々は毎日百余名の生徒と接触した。すなわち彼等は教室においてだけでなく、しばしば我等の家まで来訪し、目付役の付添いのない場所で学問を進めることが出来た。(中略)なおまた、我々はこれらの日本人諸君と相

携えて、或は船内で、或はまた陸上で、幾日も幾日も、また幾夜も共に過ごしたが、それが相互の信頼感を大いに増した。特に彼等が、付添役のいない処で、彼等の考えを存分に語る事ができた場合など、それがヒシヒシと感じ取られた。我々はこれによって、これまで知られなかつた幾多の事実を明らかにすることができた。⁵⁾

海に生きる若者たちが、あらゆる監視から解放されて、自由にそして深く語りあったことが理解される。そうした会話のなかに当然、自らの生き方や、当時は禁じられていたキリスト教についての考えなどが含まれていたと思われる。カッテンディーケの『日記』をみると、彼は目付である木村所長をあまり好まず、むしろ、オランダ語を解し、責任感も強く、明朗である勝海舟に信頼を寄せていたことがわかる。⁶⁾

つぎに、教師団の団長であったカッテンディーケがどういう人物であったかをみることにする。彼は、オランダのヘーグに生まれ、メーデムブリックの海軍兵学校を卒業し、西インド諸島、東インドに勤務し、オランダ国王の侍従官をつとめ、長崎に来たときは、41歳であった。

帰国後、海軍大臣をつとめ、後には外相を兼務するなど、オランダにおいて有力な働きをした人物であった。彼は、海軍の航海術や兵術にたけていたのみでなく、敬虔なキリスト教の信仰の持主であった。彼は日本の宗教的寛容に深い関心を示し、この国に信教の自由が確立されることを願うと共に、⁷⁾日本人の中に宗教的寛容の態度のあることを認めてこういつている。

人は何と言おうが、とにかく日本人ほど寛容心の大きな国民は何処にもない。そうしてもし彼等の寛容心がただどうであろうが構わないという無頓着の結果でなかったならば、この点において我々キリスト教徒はたしかに教え導かるべきであろう。⁸⁾

このように、カッテンディーケが信教の自由に関心を寄せていることは、プロテスタントの中でも改革派が支配的であるオランダ人の宗教的性格を反映している。彼はこういつている。

私の所信によれば、これこそ(宗教的寛容の姿勢)日本人のキリスト教に対する先入感を一掃して、キリスト教の生命は愛そのものであって、近ごろ一部の信者が言うがごとく、決して異教不寛容を唱導するものではないことを、日本人一般に信ぜしめる最善の方法である。⁹⁾

ここで重要なことは、彼が寛容な姿勢で日本人に接していたということ、そして主体的に、彼自らは、「キリスト教の生命は愛そのもの」と信じていたということである。それだからこそ、彼は船中でも定期的に礼拝を守り、また自分たちの礼拝堂の建設にも熱意を示している。

我々の宗教の行事は、また条約によって自由に少しの拘束も受けずに許可せられた。最初、我々は船中でこれをやっていた。この権利を認められたのは、1857(安政4)年10月に入ってからである。私はこの権利を行使し、毎日曜日、出島商館の一室において、行事を執らしめた。望むらくは、小さな教会堂でも建立しようという気持ちになって貰いたいものだ。¹⁰⁾

ここでいう「宗教の行事」とは、公同の礼拝(public worship)のことである。

カッテンディーケは、はるかに母国を離れた異郷の地にあつて、不安と郷愁にかられることもしばしばであつたにちがいない。そうした中で、彼は信仰をもって生きていた。彼は日記に、「人間というものは、この到るところの善美の創造主にまします神の御心とさえ一緒に居るならば、決して淋しいことはない。」¹¹⁾と告白している。こうしたカッテンディーケの信仰者としての主体的な姿勢は、勝海舟に少なからずの影響を及ぼしたと思われる。そこには人間を越えた創造主の視点から、自分を含めてすべてのものを相対化すると共に、良心に基づいた自由を尊重する姿勢が基調になっていたことを知るのである。

3. 讚美歌に寄せるおもい

さきにみたように、長崎海軍伝習所の教師団の団長であつたカッテンディー

ケは、教虔なキリスト教であり、改革派の伝統にしたがって、他者の信教の自由を尊重すると共に、自らの信仰を守り、はじめは艦内で、のちには、出島の商館で公同の礼拝を守っていた。

勝海舟全集(12巻)に収められている「海軍伝習の記録」によると「ヤパン号」(咸臨丸)に乗って、安政4年に長崎に来た第二次の教師団や乗組員は37名あり、その中には、不行跡で帰国したものや、酒を飲んで乱暴を働いたものなどもいた。しかし、彼らは毎夕に礼拝をもち、日曜日ごとには、公同の礼拝に参加し、自らを新しくする機会をもっていた。さきにものべたように、目付や通訳を排して、勝海舟は、じかに、オランダ人たちの信仰生活に触れていたにちがいない。

こうした背景から、長崎海軍伝習所の時代に勝海舟がオランダ語の讚美歌を訳出していることは、きわめて興味深いことである。

蘭学史研究家菱本丈夫は、1971年5月に開かれた蘭学資料研究会で、勝海舟訳オランダ語讚美歌「ローフ・デン・ヘール」について詳細な研究報告をなし、さらに1972年9月発行の『礼拝と音楽』誌上にもこのテーマについての小論をのせている。¹²⁾

従来からこのうたは、勝海舟が訳した近代詩の一つとして注目され、¹³⁾それが木村毅によってオランダの讚美歌であることがわかり、さらに菱本丈夫の研究によって詩篇のダビデのうたからとられたことが判明した。¹⁴⁾いまここに、その研究史を辿ることは、紙数の制限のため割愛しなければならないが、勝海舟が日本における詩篇の讚美歌の最初の訳者であったということが言えると思う。ここに、その訳文を記しておく。

なにすとして、	やつれし君ぞ	哀れその
思ひたわみて、	いたずらに	我が世を経めや
あまのはら	ふりさけみつつ	あらがねの
土ふみたてて	ますらをの	心ふりおこし

清き名を	あめにひゞかし	かぐはしき
道のいさをを	あめつちの	いやとふながく
聞く人の	かゞみにせむと	我はもよ
思ひたわまず	おほろかに	此世をへしと
おもやつれとも。	¹⁵⁾	

菱本丈夫は、この詩を訳出したときの勝海舟の動機についてつぎのようにのべている。

その動機であるが、これは、毎夕平信徒である多数のオランダ人が礼拝する姿に、信仰を守るために戦って建国した祖国とその同胞の今も変らぬ信仰生活に、愛国の源泉があることに思い当たり、海舟自身、エホバの前にぬかづき、神をほめたたえ、神にちかった文字であった。当時はまだ、キリスト教禁制の時である。海舟が何人にも、説明しなかったのはそのためであり、また、キリスト者の根本義をよくとらえていたからでもある。¹⁶⁾

このうたは、オランダ改革派教会が17世紀に刊行した新約聖書と詩篇の讚美歌の合冊の中に含まれている。Loof, den Heer がそのうたい出しで、それは詩篇103篇の初行をあらわしている。ドイツ語版ではLobe den Herren となり、わが国の現行讚美歌では譜がちがっているが、第九番に収められている。現在世界の教会の会議などでも、この讚美歌はよく愛唱されており、ジュネーヴの世界教会協議会から出版されている讚美歌集(Cantate Domino, Oxford University Press, 1980, 第108番)にも含まれている。

長崎海軍伝習所開設にも寄与した長崎オランダ商館長ドンケル・クルチウス(J. H. Donker 1813—1879)が海軍教育をなすにあたって、長崎奉行所に宛てた書簡でこういつている。

一、師に相成り日本へ罷り出で候輩「フレイデン」子細これあるまじく候、¹⁷⁾

この「フレイデン」はオランダ語の Vrijheiden で、英語で freedom、ドイツ語の Freiheit にあたり、自由を意味する。彼らは、人間であれば、上下の差別なく、その地位や身分のへだたりなく、すべての人びとが自由に生活し得ることを自由とした。そして、その自由の根源を、道であり、真であり、生命である神においていた。真摯な探求心にみちていた日本の若者たちのなかには、オランダ人の教師団、とくに初代の団長であったペルス・レイケンや第二代の団長カッテンディーケなどの生き方に触発されることが少なかった。¹⁸⁾勝海舟はそのような中でこの讚美歌に接したにちがいない。毎日夕方、定刻になると長崎の寺の鐘がなりひびく。それに呼応するかの様に、海のものたちの歌声がこだました。はじめは軍歌ではないかと思った。「ローフ・デン・ヘール！」それは一体何だろうといぶかりながらも勝海舟はその意味を探求したにちがいない。

菱本丈夫は「長崎の鐘」と題して、長崎時代における勝海舟とキリスト教について、つぎのような随想を書いている。

オランダの人びとは国王の命をうけて、遠くからやって来た。そして彼らはその重い任務を完了するため日夜、忠実に努力した。朝夕三色旗の下に集まり「ローフ・デン・ヘール」の歌声とともに神へのちかいをそたてていた。礼拝を守りつづけて来た。海舟も時折り、彼らと共に出島のヨーロッパ倉庫に姿を見せるようになった。軍歌だと思っていた「ローフ・デン・ヘール」はダビデの経文(詩篇歌)の百三篇であることを知る。やがて、その詩篇歌集に親しむ様になった。そして、「みくに詞に試みた」。すなわち、「何すてと、やつれし君ぞ」がそれである。詩篇102を読んで、自分たちの悩みはダビデの悩みと同じであり、小さなエゴではなく、国王としての悩みであることを知る。(詩篇103の20)。「みことばの声にきき従い、これを行なう、力強き勇士たちよ、エホバをほめよ」、海舟はこの「みことばの声をきく」勇士たちの手本(かがみ)とならんと、ひそかに神に誓う。¹⁹⁾

多少想像をまじえた表現であるが、勝海舟が詩篇の讚美歌をオランダ語から邦訳している背景を理解する素材を提供している。司馬遼太郎が勝海舟の国民の思想の形成過程にカッテンディーケの影響があり、それを「カッテンディーケの触媒」と呼んだことは、さきに触れたが、そこには、オランダ人の生き方の根底にプロテスタント改革派の伝統があったことを見逃してはならない。公同の礼拝において、詩篇の讚美歌をうたうことは、ジュネーヴ以外の改革派の伝統であった。

のちに1860(安政7)年勝海舟は咸臨丸の鑑長として太平洋を渡りサンフランシスコに赴き、約三週間滞在しているが、その間に彼はしばしばキリスト教の礼拝に出席している。彼はつぎの様に述懐している。

アー、西洋では、いつも礼拝堂〔教会〕へ行つたよ。大層褒められたよ。世話をしてくれた親仁がごく熱心だったから、その息子などと一緒に行く²⁰⁾とネ、ホーリー、ゴースト、ホーリー・ゴーストで固めて祈ってるよ。

キリスト教禁制の時代であったが、外国滞在中とは云え、海舟がすすんでキリスト教の礼拝に参加している様子をうかがうことが出来る。

4. キリスト教の容認

幕末にあつて、キリスト教がまだ邪宗門として排斥されていた時代に勝海舟はいち早くキリスト教に対する寛容の姿勢を表現している。1861(文久元)年1月12日、横浜の居留地に天主堂が竣工し、その落成式に多くの見物人が集り、キリスト教に対する関心を高めた。これに対して、当時は未だキリシタン禁制下であったので、神奈川奉行は、見物人20名を捕え、神父に対し、日本語の説教を禁じたことがあつた。勝海舟の下に、事態を心配したフランスの宣教師が抗議にきたのを、一方ではなだめて帰し、他方ではそれらの見物人を釈放するように尽力している。「どうしてあなたはそういうこと

をなさいます」と外国人が感心してたずねると、ややとぼけて、「ナニ、私はほかに知りません。宗教の事も存じませんが、もし横浜中のものが、皆あなた方を信じてしまえば、致し方がありません。天堂に入るのを押えた所か、効がありませんから²¹⁾」と返答するあたりは、いかにも勝海舟らしい。

またあるとき、西郷隆盛が維新のはじめ、耶蘇教にどう対処したらよいかを勝海舟は黙許をととなえ、西郷はそれを受けいれたと伝えられている。勝海舟は1871(明治4)年にあらわした「耶蘇黙許意見」においてこの間の事情をのべている。

明治一年、未だ定約書をもって、政府に入れざる時にあたり、教法の紛擾あり。慶応前後の頃、横浜へ天主堂建築の議あり。(教師仏人ジラルル氏)我が政官、殆んど困じ、説論数日、ついにこの拳を拒む能わず。約している。「外人のこの堂に入る。我は不問に置くべし。もし我が邦人を導き、もってこの教に入らしめば、我が邦は縛してもって国法に処せん」と。

この後、邦人ひそかに堂に入り、その教を信ず。我が探索吏、ついに縛してその罪を責む。彼の教化師、これを聞いて怒り甚だしく、公使に訴え、政府に問う。未だその局を終らずして戊辰の事あり。予この時、政府の全権をもってフランス公使に接し、邦民の縛を解き、これを不問に附せり。

公使、予に問う、「君が処置如何ぞ、従前の酷に似ざる」と。予答えていう、「それ教法はもとより政府の関せざるをもって良しとす。前の教法に関して、酷烈の処置に及びしもの、我が邦固有の制、ただ邦人に施すべくして、外国人に施すべからざるものなり。今や我、暫時の間、政権を有す。その不是なるはもって改むべし。また何ぞ疑いを存せんや」と。公使、ただ黙して止む。この後、明治3、4年、朝廷、西陲の耶蘇教に入る者数百人を縛して、諸藩に附す。この時、西郷氏、予に問う。「西教の事、その処置如何して可ならんか」と。予答えいう。「ただ黙許あるのみ。もし教法に於いて政府関係を有せば、その結局、数万の無辜を殺すに非ざれば能わざるなり。これもつとも惨にして、為すに忍びざる事なり。もし天草の乱、教法を師とし、不揆の浮浪事を挙げ、つひに天下の兵を動かし、住

民数十万を殺戮して、もってその教を滅殺す。今や然らず、外人、我が邦に入る者、年毎にその数を増す。昔時とその勢を反せざれば、治法もまた立つべからず。方今、邦内多事、宜しく黙許し、その漸をもつて先とせんか」と。西郷氏、ただ黙して止む。²³⁾

信教の自由は、近代国家において幾多のたたかいの中から実現されたものであったが、勝海舟が長年にわたって弾圧されてきたキリスト教を容認し、信教の自由を保証する方向を志向していることは注目すべきことである。²⁴⁾

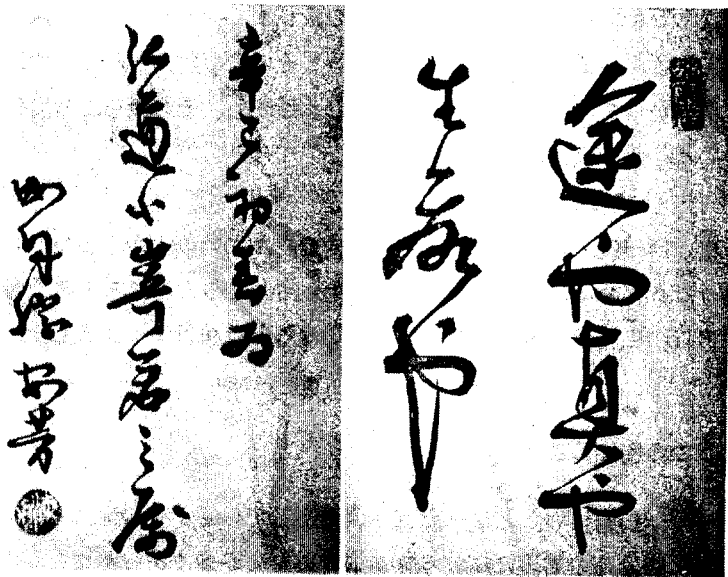
5. 五つの聖書のことばの揮毫

勝海舟は、聖書のことばをしばしば揮毫している。その理由として、後述のように勝海舟の周辺には、キリスト者の友人が多くあったことがあげられるが、彼自身が聖書のことばに関心をもっていたことを示している。

彼が聖句をしばしば揮毫したということは、親しい基督者から所望されたものであったと思うが、彼自ら聖書のことばを読み、そこに学ぶものを見出していたからと思われる。わたしが調べたところによると、勝海舟は五つの聖書のことばを揮毫しており、さらに探索するとまだ見出されるのではないかと思う。今ここに、それらの五つの聖書のことばとその写真を掲げ、その出典、背景などについて、それぞれ吟味してみることにする。

1. 「途也、真也、生命也」

この書は、1881(明治14)年に小崎弘道が訳出した『宗教要論』の扉に題字として勝海舟が寄書したものである。「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14:6)のことばを漢字で表現したものである。この書物の原題が The Way, the Truth and the Life であることからこの聖句がとられている。原著者は、新島襄の恩師でアーモスト大学の総長をつとめた J.H. シーリー(J.H. Seelye)で、彼が1872年にインドで行った講演を書物にして、1873年に英文で出版したものである。ちなみに、新島襄はこの書物に序文を



① 勝海舟揮毫聖句、「途也 真也 生命也」(ヨハネ、14:6)

寄せている。²⁵⁾

2. 「滅亡の先、人心倨傲、得榮之先、必有謙遜」

この書は、旧約聖書の箴言18・12のことばからとられている。新共同訳聖書では、「破滅に先立つのは心の驕り。名誉に先立つのは謙遜」と訳されている。恐らく勝海舟の手許には、漢訳聖書があり、それを参照にし、随時自分の好みによっておきかえて揮毫したものと思われる。手許の『新旧約全書』(上海聖經会、1925)をみると、この箇所は、「敗壞之先、人心驕傲、尊榮以前、必有謙卑」となっている。さらに、横浜の米国聖書会社から1887(明治20)年に発行された『訓点旧約全書』をみるとこの場所は、「滅亡之先、人心倨傲、得榮之先、必有謙遜」(箴言18:12)とあり、倨傲を倨傲とおき変えている以外は全く一致するので、勝海舟の座右にこの版の聖書があったものと思われる。なお前にあげた「途也、真也、生命也」も『点訓新約全書』(明治20年)と同じである。



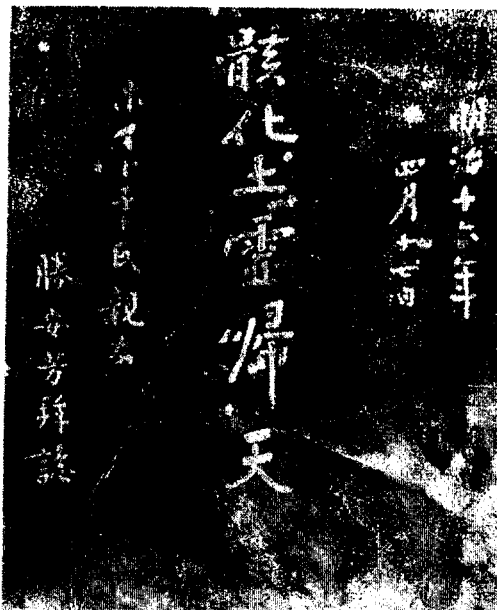
② 勝海舟揮毫聖句、「滅亡之先 人心倨傲 得榮之先 必有謙遜」(箴言、18:12)

この書は、長く岡山県の天城教会の会堂に掲げられていたが、現在は天城の津田家に保存されている。これは、新島襄の秘書役をつとめていた加藤寿が1891(明治24)年7月末に、勝海舟を訪ね、揮毫してもらったものである。海舟日記には、「[明治24年] 七月二九日同志社書生三人²⁶⁾とあるので、加藤は他の二名の同志社の書生と勝郎を訪ねたものである。加藤寿(1858—1946)は、日本組合基督会天城教会の創立者津田熊次郎、美歌子の息子として生れ、加藤家の養子となり、岡山教会で金森通倫から受洗し、同志社に学び、一時宮崎県高鍋で伝道にあたった。その後、新島襄の秘書となり、1886年より同志社書記、幹事を歴任している。

この聖句を選んだのは、加藤であったか、勝海舟であったかよくわからない。しかし、この聖句が表現している意味は、勝海舟が抱いていた精神と相通ずるものがあるように思う。

3. 「骸化土、靈帰天」

この聖句は、勝海舟の赤坂の氷川邸内に居住していたお雇外人教師ウィリアム・ホイットニー(William C. Whitney)の妻アンナ(Anna)の墓碑として、揮毫したものである。勝海舟は、キリスト教の信仰をもったアンナ夫人の人柄とその信仰に心うたれていた。かつて大阪教会の牧師宮川経輝が勝海舟を訪問した際、「宗教については、ホイットニー夫人の宗教以外のものはいやだ」といったといわれている。²⁷⁾ホイットニー家の人びとは、勝邸内に住居を与え



③ 勝海舟揮毫聖句、「骸化土、霊帰天」(コヘレトの言葉、12:7)

られ、そこで毎日曜日キリスト教の集会を開き、勝家の人びとも積極的に参加していた。

この聖句は、旧約聖書のコヘレトの言葉(伝道の書)12:7にある言葉である。新共同訳では、「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」となっている。なお、勝海舟が用いたと思われる訓点旧約全書では、「塵必乃然帰土、靈魂必帰於賜之之神」となっている。旧約聖書によると、神は「土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れ」(創世記

2:7)人間が生き者として存在するに至った。そして、人間は死んでその骸は再び塵に返るとされている。「息吹を取り上げられれば、彼らは息絶え元の塵に返る」(詩篇104:30)、また、「すべては塵から成った。すべては塵に返る」(コヘレトの言葉3:20)と考えられている。勝海は、塵を骸に置きかえ、「骸は土と化し、霊は天に帰る」と簡潔直載に表現している。なお、アンナ・ホイットニーは1883(明治16)年4月17日赤坂水川の勝邸内の自宅で永眠し、青山墓地に埋葬されている。²⁸⁾

4. 「義人必由信而得生」

この聖句は、青山墓地にあるアンナ・ホイットニーの墓の背面に刻まれている。アンナ夫人が永眠したとき、勝海舟が揮毫したものである。

アンナの娘、クララは、勝海舟が長崎時代に親しくした梶くま(玖磨)との間に出来た梅太郎と結婚した。そして、長男(ウオルター)が生まれたとき、海

舟は、玖磨(通称お久)と梅太郎の名をとって、その子に梅久という名をつけてやって祝福した。クララは、1887年4月17日、母アンナの永眠4年目の記念日に、生後間もない梅久を抱いて青山墓地をたずね、彼女の日記にこう記している。

今日は最愛の母の命日である。私たちが彼女を視界の外に葬ってから四年目である。朝早くお墓に花を飾るため青山墓地に出かけた。これが今私が母にしてあげられるただ一つのことなのだ。(中略)
「我はよみがえりなり、生命なり、正しきものはその信仰によって生くべし」お母様、私は再びあなたにお目にかかります。(中略)

この年月は何と長く、又変化に富んだものであったことか。今日私一人で行ったのではなくて、可愛いウオルター坊やをつれて行った。この子は梅太郎と私の息子で、生後六ヶ月になる。私はとても自分が変わったように感じた。²⁴⁾

この手記の中には、はじめて母親となって生命の誕生をじかに経験した彼女のリアルなおもいがあらわされている。と同様に、愛する母を復活の信仰を通して追想している姿が反映されている。文中に彼女は、「正しきものは、



④ 勝海舟揮毫聖句、「義人必由信而得生」(ハバクク書、2:4)

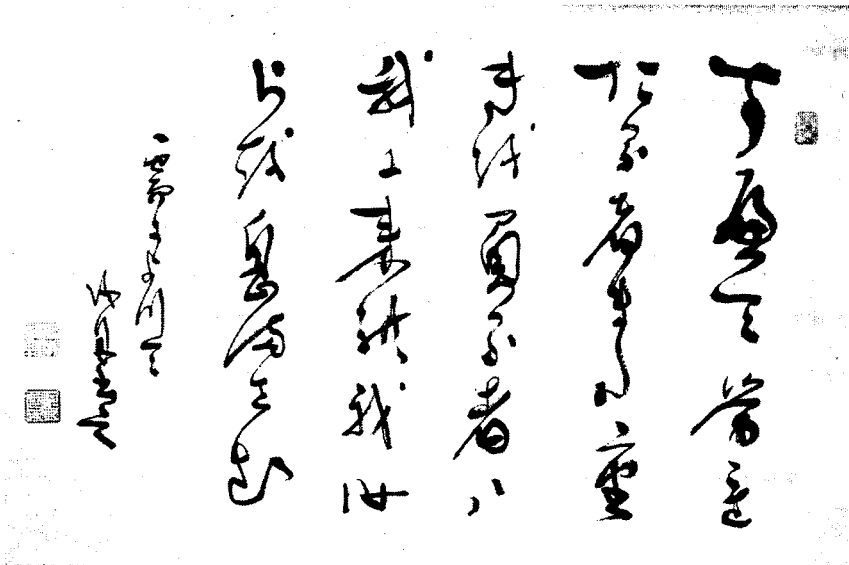
その信仰によって生くべし」という聖句を引用しているが、この聖句こそ、勝海舟がククウラのために記し、クララの墓石の裏面に刻まれたものであった。この聖句は、旧約聖書のハバクク書2章4節にあることばで、漢訳聖書(上海美国聖經会、1925年)によると「惟義人因信得生」とある。勝海舟が手許において用いたと思われる先述の『訓点旧約全書』(1887年)をみると、「惟義者必由其信而得生」とあり、勝海舟の書いたものと殆んど同じである。なお、この聖句は、新約聖書においても三回引用されている(ローマの信徒への手紙1:17、ガラテヤの信徒への手紙3:11、ヘブライ人への手紙10:38)。このことは、この聖句が初代のキリスト者たちの中で、愛用されていたことを物語っている。さらに、この聖句はキリスト教の葬儀で読まれ、墓石に刻れることが少みなかった。なお、海舟はこの聖句を誌し、左側に「録聖書之語」と銘記している。

5. 「すべて^{つか}勞れたる者 また重きを負ふ者は我に來れ、我汝ら^{やす}を息まさむ」

わたしは、最近ふとした奇縁からこの書の存在を知らされた。この書は、マタイによる福音書11章28節「疲れる者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに來なさい。休ませてあげよう。」(新共同訳)という聖句を文語体にあらわしたものである。残念なことに、この書には年代が明記されていないので、何時書れたのか明確ではない。しかし、本書を所蔵している山岸和夫氏は、つぎのように本書のいわれを記しているので、それを通して本書の背景と大体の年代を知ることが出来る。

この書は、長田の祖父が新島先生のお使いで勝さんのお邸へ行った際玄関で聖書を開き、この句を書いて下さいと要望して書いて頂いたものであり、そのため、求めによりて記してあります。この軸物は祖父が大切にしていたもので、生前から私の死後は八千代(私の母)にやると云い後してあったため、現在私の所に有る次第であります。³⁰⁾

ここで明らかになることは、本書は、長田時行(1860~1939)が新島襄の依



- ⑤ 勝海舟揮毫聖句、「すべて労れたる者 また重きを負ふ者は 我に來れ
我汝を息まさむ」(マタイ、11:28)

頼をうけて、勝海舟のもとに使いに行ったとき書いてもらい、次女八千代(山岸)に譲ったことがわかる。長田時行は、岡山の出身で、藩校に学び、1875(明治8)年には岡山藩から選ばれて海軍の伝習所に入るところであったが果されず、東京に出て英語を研修するため築地のカロゾルス宣教師の学校に学び、はじめてキリスト教に触れ、さらに横浜のバラ塾でも学び、一時同志社で学んだのち、安中に赴き、暫く滞在、1881(明治14)年海老名弾正から受洗、東京に出て、和田正幾、元良勇次郎などに招かれて学農社で働いた。東京一致神学校でも研修し、1883(明治16)年6月から霊南坂教会の仮牧師を1886(明治19)年8月までつとめた。その間1885年に約一年同志社で学び新島襄の訓陶を受けた。長田は、1886年から神戸多聞教会、その後天満教会、新潟教会などで牧会伝道にあたり、その間日本基督教伝道会社社長、梅花女学校校長などをつとめるなど、巾ひろい影響を与えた。晩年は東京千歳烏丸に居を定め「紫苑会」を運営し、幼稚園を営み園長をつとめ、聖日の礼拝説教を担当した。こうした彼の経歴からすると彼が新島襄の使いとして勝邸を訪ねた時

は、霊南坂教会の仮牧師時代であったと思われる。とくに新島襄が1884年4月から1885年12月まで外遊していたことを考えると、おそらく、同志社で学んだのちすなわち、1885年から1886年8月霊南坂教会を辞するまでの間と推定される。ちなみに、彼は1886年11月24日按手札を新島襄の司式の下にうけている。

勝の揮毫した他の聖句がみな漢字で書れているのに対し、この聖句は仮名文字を主として流麗な筆致で誌されている点において特色がある。さらにこの書は、長田時行が所望して揮毫してもらったものであるが、その聖句の意味するところには勝海舟も共感を覚えていたものと思われる。

6. 勝海舟をめぐるキリスト者たち

勝海舟は、内外の人びとと広い交流を楽しんだ風流人であった。赤坂の氷川の邸の居間には、多くの人びとがやって来た。中には、外国にゆくために餞別を貰いにくるもの、揮毫をせがむもの、難問難題をもちこむものなどさまざまであった。彼は、来る者は拒まず、去る者は追わずの姿勢で淡々とつきあっていた。とりわけ、身分の高いものや金持を大事にすることもなく、却って、一般民衆とのはなしあいを楽しんでいた。

こうした屈託のない勝海舟と親しい交友関係をもった人のなかにキリスト教徒が少なかったことは注目し値することである。勝海舟が何事につけても信頼を寄せ、勝家の人びとも親しい交りをもった人びととして、津田仙と富田鉄之助をあげる事が出来よう。津田仙(1837～1909)は、1873年渡欧のときに聖書にふれ、帰国後アメリカ・メソジスト監督教会宣教師、J.ソーパーの人格に影響をうけ、1874年彼から受洗した。翌年欧米の農業を日本に導入し、キリスト教に根ざした教育をすすめるため学農社を設立した。『クララの明治日記』によると、彼は日曜日の夜に勝邸内のホイトニー宅で開かれた家庭集會に青年たち数名を連れてしばしば参加している。その中には、元良勇次郎、中島力造、上野栄三郎、和田正幾などがあげられよう。勝家の人びとは、麻布本村町に設けた、津田仙の農場をたびたび訪れて交友のとき

をもっている。

さらに、勝海舟は、家庭の悩みごと、津田仙に打ち明けて相談していた。いわば二人は心を開いて話しあえる親友の間柄であった。ちなみに、勝海舟の墓のある洗足池畔の土地(六反歩)は、明治23年末に津田仙の世話で勝海舟が買ったもので、海舟は、そこに別荘(洗足軒)をたて、友人たちを招いて交遊のときをもっていた。³¹⁾

富田鉄之助(1835～1916)は、仙台藩より遣わされて勝海舟の氷解塾に学び、その才能と人物を認められて、庄内藩の高木三郎と共に勝海舟の長男小鹿の学友としてアメリカに留学した。留学中キリスト教に深い関心をもつようになった。たまたま、滞米中英語を習ったのがアンナ・ホイットニーで、富田は彼女から聖書を学んだ。アンナ夫人は富田が熱心に聖書を学ぶ姿を見て、はるばる日本に来る気をおこしたといわれている。³²⁾ 来日後アンナ夫人がキリスト教の伝道にあまりにも熱心であったため、富田鉄之助が彼女に伝道活動を差しひかえるようにと忠告したこともあった。³³⁾ 日本で戦乱がおきたという報を留学中に伝え聞いて、いたたまれず、託された学友の小鹿の世話は、ニュージャージー州のニューブルンスウィックのラトガース大学で学んでいた横井小楠の甥である左平太、大平にまかせ、富田と高木は慶応4年帆船にのって横浜に向かったが、途中台風にあい、生命からがら香港に辿りつき、そこから便船によって横浜に5ヶ月かかって帰国した。勝海舟は、日本に世界の状況に通じた人材の乏しいことを説き、幕府や諸藩の興亡などはどうでもよいことであるときとして、自ら旅費を出して、次便でアメリカに送り返した。こころあたりにも勝海舟の人物養成にあたる気骨をみる事が出来る。二人は引きつづいて六年間研鑽に励んだ。富田は、その後、ニューヨーク副領事となり、岩倉具視を全権大使とする米欧使節団の世話にあたり、上海総領事、英国公使館一等書記官を歴任した後、大蔵省に移り、日本銀行創設に尽力し、初代副総裁、第二代総裁をつとめた。勝海舟が新島襄に書き記した「六然訓」を富田鉄之助にも書き与えている。それは、富田がときの大蔵大臣松方正義と意見を異にして日銀総裁を辞任したときに与えたものであった。³⁴⁾

富田は勝海舟の門下生中の筆頭世話人役で、勝家の家族の人びとも親しく交り、その面倒をみていた。勝海舟歿後は洗足会を組織し、終生勝海舟への敬慕をあらわした。

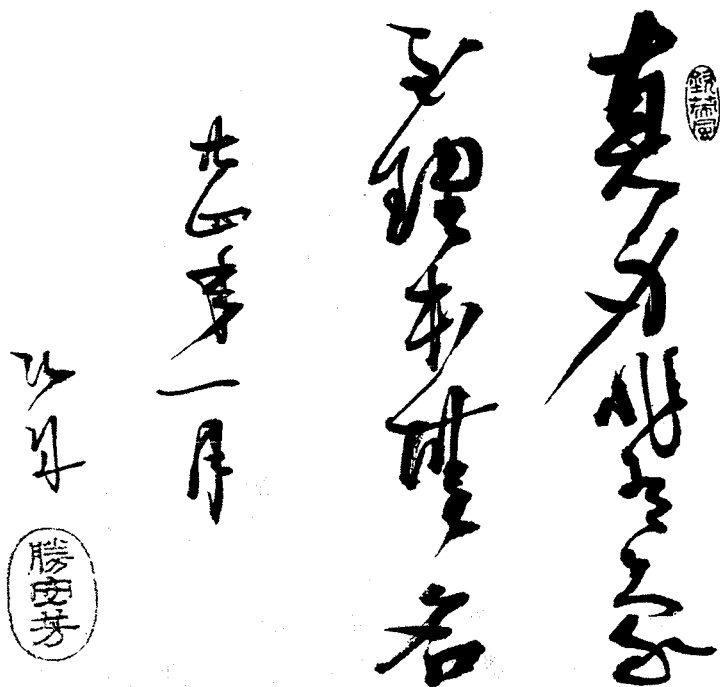
新島襄(1843~1890)と勝海舟については、別の論文を記したので、ここでは要点のみを書きとどめることにする。両人は、前後四回あい、そのたびに理解を深めている。キリスト教主義の学校を京都に設立しようとする新島襄の考えに可成り批判的であった勝海舟も、1888(明治21年)10月12日の第四回目の会談では賛意を表し、応分のの寄附を申し出たのみでなく、他の関係者への斡旋の労をとることを承諾している³⁵⁾。新島襄の生前には六然訓を揮毫し、新島は自宅の応接間に掲げていた。さらに新島襄の葬儀にあたって、勝海舟は、新島が愛した二つのことばを丈余の白縮緬に揮毫し、それをかかげて、大江義塾や民友社の人びとが葬列に加ったことが記録されている。その一つは「自由教育、自治教会、両者併行、邦家万歳」ということばであり、もう一つは、「彼等は世より取らんと欲す吾等は世に与えんとす」ということばであった³⁶⁾。新島襄の墓碑は、勝海舟の揮毫によることは広く知られている。とくに、その碑背に誌されていることば、「友人勝安芳悼新島氏之長眠追想之余書之」は、両者の間の深い心の響きをあらわしている。

これらに加えて、新島襄の没後一年を経ずしてその伝記がJ.D.デイヴィスによってあらわされたとき、勝海舟は題字を墨書している³⁷⁾。

この書について杉井六郎氏はつぎのようにのべている。

なおこの伝記には「真身非有象、至理本無名 廿四年一月 海舟」と墨書する題辞が載せられている。

この題辞については、何故か従来検討されることがなかった。もちろん、勝がいかなる手沢本から、張蠟の『全唐詩』巻七〇二に見える「宿開照寺光沢上人院」と題する五言律詩の中の二句を採ったか、しかも老荘の思想かとも思われるこの詩句を新島の伝記に題辞として撰んだのは何であったか、その寓意、着想など、改めて勝海舟と新島襄の二人の思想の交錯する



⑥ 勝海舟揮毫『新島襄先生伝』(J.D. デイヴィス)
題字「真身非有像 至理本無名」

鍵を追求することが必要であろう。³⁸⁾

さらに杉井氏は張贛の詩は次のようなものであり、海舟はその二行目を取り、さらに、「有像」を「有象」とし、「無経」を「無名」としてしていることが指摘している。

静室譚玄旨 清宵独細聴
真身非有像 至理本無経
鐘定遙聞水 楼高別見星
不教人触穢 偏説此山靈³⁹⁾

この題字をわざわざ新島襄伝の題字として撰んだ勝海舟の心は何処にあっ

たのであろうか。壮図半ばにして世を去った新島の姿はいますでになく、すべてがすぎ去ってゆくはかなさを覚えるなかに、この書をしたためたのではあるまいが。彼が、アンナ夫人の死を惜しんで「骸化土 靈帰天」(コヘレトの言葉12:8)と記したのと通ずるおもいがする。コヘレトの言葉はつづいて、「なんと空しいことか、すべて空しい」(同12:9)と記されている。人間のはかなさを想うにつけ、真の姿の無限性に想いを致すとともに、究極的な道の普遍性を考えたのではなかろうかと愚考する。いづれにせよ、この題字の意味は、さらに吟味されるべきものである。

7. 伝記・文書の編著者たち

勝海舟の記録や伝記の編著者には、不思議とキリスト者がかかわっている。『海舟座談』の編者である巖本善治(1863~1943)は、さきにあげた津田仙の労農社に学び、木村熊二から洗礼をうけ、『女学雑誌』を発行し、明治女学校を創設したキリスト者である。彼は勝海舟の晩年(明治28年7月から明治32年1月まで約34回)週一回ないし二回、氷川の勝邸に赴き、その座談を筆記した。当初は『海舟余波』(明治32年)の題であらわし、さらに附録として勝海舟と親しかった人びとの回想録を加え『海舟座談』として出版した。勝海舟が永眠したとき通信、連絡の事務をしたのは巖本善治、津田仙、戸川残花の三人であり、彼らが勝海舟から信頼をうけていた身近な人びとであったことを物語っている。⁴⁰⁾

徳富蘇峰(1863~1957)、同志社で学び新島襄から受洗し、中途退学をしたが新島襄を終生敬慕し、同志社のために尽力した。彼は1886(明治19)年上京し、民友社をおこし、文筆家として活躍をはじめますが、勝海舟の知遇を得て氷川の勝邸の一隅に借家住いをしていた。

予はやがて榎坂町から氷川なる内田夫人(勝海舟の長女夢)の借家に住むこととなり、特にその好意によって、別に予の父母の為に一棟を新築して

貸与せらるゝことになった。而してやがてはその附近に予の弟蘆花も亦住むことになった。(中略)名義は兎も角、事実には勝先生の邸内に、帝国議会開設前から、日清戦役後、予が洋行する迄、居住していたと云ふことが出来る。⁴¹⁾

蘇峰は明治29年に洋行に出ているので、10年近く徳富一家(蘇峰、蘆花そして父一敬の家族)は、氷川の勝邸内に居住していたことになる。その背景には、かねてより勝海舟が横井小楠を尊敬し、その高弟である徳富一敬を敬愛していたことが指摘されよう。そして、その一敬も晩年明治40年4月14日本郷教会で海老名弾正から洗礼をうけて入信するなど、勝家をめぐる人びとの中にキリスト教の色彩が深くあったことがわかる。⁴²⁾

徳富蘇峰は、さきにも引用した吉本襄編『氷川清話』に序文を寄せているのみでなく、民友社の同人とはかり『勝海舟』と題する評伝と語録集を出版し、冒頭に「海舟先生」と題する一文を寄せている。⁴³⁾さらに、徳富蘇峰は改造社が刊行した偉人伝全集の一つとして『勝海舟伝』を担当、執筆している。⁴⁴⁾

民友社の記者であった。山路愛山(1865～1917)も勝海舟の評伝を記している。これは明治維新までの勝海舟の生活を口語体で比較的わかりやすくのべたものである。⁴⁵⁾彼は、幕府の下に江戸で生れ、静岡に移り住み、1883年静岡メソジスト教会で平岩宜保牧師から受洗し、『護教』や『信濃毎日新聞』主筆として健筆を振った人であった。

もう一人戸川残花(1855～1924)のことに触れておきたい。彼は備中(岡山県)早島の領主であったが、西欧文化にひかれ、開成学校、慶応義塾などで学び、宣教師D. タムソンより聖書を学び、1874年に受洗し、伝道に尽力し、一時的岸和田教会の牧師をつとめ、その後日本基督教会に転じ、文筆家として活躍した人である。彼は徳川幕府末期の歴史を『旧幕府』の題で編集したが、その中には勝海舟の父勝小吉に関する記録が収められている。⁴⁶⁾

わたしたちは、勝海舟が信頼をして交友関係を結んだ人びとに、キリストの信仰をもったものが多かったことを挙げて来た。この外にも、小崎弘道、横井時雄、長田時行、木村熊二、中島信行、中村正直、原胤昭といった一連

のキリスト教徒が勝海舟の交りのサークルの中にあっただけでなく、これは偶然なことではなくそれらの友人の背後にあるキリスト教の精神に彼自身共鳴するものがあったように思われる。

8. 外人のみた勝海舟

いち早く蘭学を学び、航海術を修めた勝海舟は、外国の人びととの交流をたのしんだ。とりわけ日本に来て日本の近代化に尽力した外国人の世話をよくした。いまその中から二つのケースを選び、彼らが勝海舟をどのようにとらえたかをみることにする。

一つのケースは勝海舟とホイットニー一家の人々との交友である。日本が開国し、外国と通商するようになるにつれて、商法や簿記を教えることが必要となり、商業学校(現在の一橋大学の前身)が設けられ、ウイリアム・C. ホイットニー(William C. Whitney)がその教師として招かれ、1875(明治8)年ホイットニー一家は来日した。一家は来日早々荷物を盗まれたり、学校の基盤が薄弱な上に、約束された地位も保証されず、その上住居もなく、異境の地で不安な状態にあった。伝えきいた勝海舟は、物心ともに援助を与え、氷川の勝邸の中に住家を建ててやった。長女クララは、来日したとき15歳であった。彼女が丹念につけた日記のおかげで、われわれは、外国人の眼からみた明治初期の日本の風物に触れるのみでなく、勝家のひとびととの交り、とりわけ勝海舟のキリスト教に対する態度を知ることが出来るのである。

ホイットニー一家は熱心なキリスト教徒であり、とりわけアンナ夫人はキリスト教の伝道に熱心であった。勝海舟は、それを承知の上で一家を邸内に招き入れるとともに、自分の子供たちに、英語を教え、聖書の講義をさせている。

明治9年10月22日のクララの日記をみるとつぎのような記録がある。

午後、ウィリイ(兄)がまだ帰って来ないので、私はアラディ(妹)を連れて勝家に聖書の授業に行った。みんな正規のレッスンをみてあげ、讚美歌と、戒律を一つ新しく教えた。讚美歌を二度歌い、お祈りをしてから聖書を読んだ。終るまで一時間半もかかったが、私たちが行ったのを皆喜んで下さったようだった。生徒は、お逸(三女)、おこまつ、梅太郎(三男)、七郎(四男)、滝村さんの弟の小松で、とても面白いクラスだった。⁴⁷⁾

英語のバイブルクラスのみでなく氷川の勝邸内では日曜日夜にキリスト教の集会が開かれていた。『クララの明治日記』には勝家のなかに教会があったように記されている。⁴⁸⁾しかしこれは制度的な教会というよりも家庭集会の様なものであったと思われる。出席者は勝家の人びと、ホイットニー一家の人びと、それに津田仙や青年たち他に外国人の参加者もあり、その数は20名前後であった。勝夫人(たみ)は集会に出席しなかったがこの集会に関心もっていたことがつぎのクララの日記の記述で推察される。

今日はとてもうれしいことを聞いた。勝夫人が毎日曜の夜、人をやって会に行く時間です、終わったら聞いたことをみな教えて下さいと各戸に言わせているという。私達の祈りが明らかに答えられたことに対し神をほめたえよ。(1880年1月4日)

クララはこの家庭集会を礼拝とよんだり、祈祷会と書いたり、集会と記したりしている。会のあとお茶菓が出て、歓談がつづき、ときには熱心な信仰問答がかわされたこともあった。

ホイットニー一家は、1880年1月に離日し、1882年11月に再来日したが、この集会は経続して守られていたことは驚くべきことである。再びクララの日記を引用する。

勝さんは、私達が留守の間小さな集会が続いていたし、門には「ヤソ

キョウ」という表札をかけていたので自分のやしきに教会をもっている、という評判が長いことたっている。この界限で我々は「キリストの説教者」と言われている。(1883年5月31日)

さらにクララ日記によると勝海舟がキリスト教に対してきわめて近親感をもっていたことが伝えられている。1883(明治16)年5月に第三回基督教信徒大親睦会が開かれたおり、宮川経輝(大阪教会牧師)が勝海舟を訪問したときの話しがつぎの様に記されている。

津田氏が来られてこんな話をされた。親睦会で雄弁に説教をされた大阪の宮川氏が勝さんをたずねたところ、宗教については、ホイットニー夫人の宗教以外のものはいやだと、言われたというのだ。勝さんは日本人の間で暮した母の生活ぶりを見、彼女の死をも見てこられた。母はその生と死に於て、真の宗教とは如何なるものかを実証した。子供たちも今又同じ道を歩いている。宮川氏は求められるまま、終日勝さんと話し合われたという。何とよるこばしいことであろう！津田氏は勝さんは今は未だ受け入れてはおられないがやがてはクリスチャンになれるだろうと言われた。(1883年5月31日)

宮川と同じ熊本バンドの出身で同志社を卒業し、霊南坂教会の牧師であった小崎弘道も勝海舟がアンナ・ホイットニーの臨終に打たれたことを伝えている。

小崎(弘道)氏は日曜日の夕方此処で説教した。集会の前に彼と話しあった時に彼はこう言った。勝さんが母の生涯と、その静かな臨終に示されたキリスト教に非常に感銘をうけられたという話をなされた。それに、臨終の時あのような静かな力もち、あれほど子供達に本分を守らせているのは、信仰の力にちがいないと言われた。小崎氏によれば、勝さんはキリスト教について話しをすることに常に興味を持ち、且つ喜んでおられるそうだ。(1983年6月19日)

こうした一連の記録をみると、勝海舟は、ホイットニー一家の人びととの交友をたのしみ、キリスト教に関心を深め、とくにアンナ夫人の生活とその臨終における信仰者の姿に心うたれていたことが明らかである。勝海舟はげくに信仰を告白しなかったが、キリスト教の精神に可成り共鳴するところがあったといえよう。

おわりに勝海舟と親交をもち、その伝記を英文で記した E.W. クラーク (Edward Warren Clark, 1849～1907) に触れておく。クラークは勝海舟から信頼をうけたラトガース大学出身のお雇い教師 W.E. グリフィスの (William Elliot Griffis 1843—1928) の推薦で、1871 (明治41) 年来日、静岡藩の設けた静岡学問所で教鞭をとった。校長の中村正直 (敬字) が年俸300円であるのに、大学を出て間もない22、3歳の独身のクラークが月給400円であったというから、いかに雇い外国人教師が優遇されていたかが推察されよう。当初の雇用契約書では「三年の期間中、宗教的問題につき沈黙する」ということであったが、牧師の家に育ち熱心なキリスト者であったクラークは納得せず、岩倉具視が最後にクラークの要求をいれてこの条項は不問となった。当時、岩倉の息子もラトガース大学に留学しており、クラークもグリフィスと同様ラトガースの出身で、岩倉の息子や勝海舟の長男小鹿を彼地で知っていたという関係が背後にあったといわれている。⁴⁹⁾ 彼は、午前中に倫理、地理、歴史、語学、午後に物理、化学、数学を教えるなど、ほとんど全科を担当した。日曜日には、自宅に学生を招いてバイブルクラスを開いた。中村正直もクラークの聖書講義によって啓発され、後に (1874年) 洗礼をうけるようになった。この様に彼は伝道に熱心で、1973年から東上し、東京開成学校で化学を教授するかたわら、バイブルクラスを開いて学生たちにキリスト教の伝道をし、1875年に帰国した。その後ニューヨークとフィラデルフィアの神学校で学び牧師をつとめた。クラークは1904年にニューヨークの B.F. バック社から勝海舟の伝記を英文で出版した。⁵⁰⁾ 本書は95頁程の小冊子であるが、英文で書かれた最初の勝海舟伝である。ニューヨークで出版されたため藍色のクロースの表紙の左肩上に「海舟勝安房」の署名が金字でうってあるが、それが逆さ

まになっている。また表題の勝安芳のローマ字の綴りを KATZ AWA としているのは、いかにもニューヨークで出た本らしいという感じがする。というのは、ニューヨークには KATZ という姓が多く、それはユダヤ系のアメリカ人の名前なのである。本書には、徳川家や勝家の人びとの貴重な写真が8枚含まれている。おそらくクラークが写真に興味をもっていたからであろう。

クラークは、副題につけたように、勝海舟の生涯を高貴な生活であったとして、ドイツの宰相ビスマルクになぞらえている。彼は「勝海舟を、キリスト教国と異教国をとわず自分がいままで会った、どの人よりも感謝と尊敬を覚える人である⁵¹⁾」と最大の表現を用いて敬愛の念をあらわしている。さらに、「勝海舟は、キリスト者ではなかったが、世界を三周した経験をもつわたしにとって、謙虚なナザレ人の根本的な人間性を彼ほどもっていた人をわたしは知らない⁵²⁾」とのべている。

クラークの表現には、アメリカ人らしい陽気なところがある反面、やや大げさなところがあり、多少ひかえ目にみる必要がある。しかし、彼は在日中に勝海舟の知遇をうけ、しばしば勝家を訪ね、親しい交りを得た。その後、帰国し三つの神学校に学び、キリスト教の牧師となった。彼は、1894(明治27)年、中国旅行の途次、来日し氷川の勝邸を訪ね、旧交を暖めるとともに、徳川幕府末期の歴史を聞きとり、それを Rise and Fall of Tycoonism (『将軍政治の興亡』)にまとめて出版している。ここで注目したいことは、キリスト教の神学の理解のあるクラークは、勝海舟を旧約聖書に登場するペルシャの王クロスになぞらえていることである。

全能なる神は、異教徒のクロス王に「あなたがわたしを知らなくても、わたしはあなたの名を与えた」と言われるように、かれ(勝海舟)は、同じ神を認識していたわけではなかったが、知らず知らずの中に神に仕え、死ぬ前に、神の光が彼にあらわれ、その限りない美しさと恵みを知りかつよるこんだ。わたしは、神はクロス王を用いたように、勝海舟を用い給うた

と確信している。そうでなければ、使徒パウロがアテネのアレオパゴスで語ったことの意味をわれわれは理解しないことになるであろう。⁵³⁾

クロス王は紀元前6世紀のペルシヤの王で当時、イスラエルはバビロンに打ちひしがれ、その指導者たちは、捕囚の身となっていた。クロス王は、異教徒であったが、神から祝福され、バビロンに捕囚された人びとを解放し、やがて神殿を再建する基盤をつくった。「あなたがわたしを知らなくても、わたしはあなたの名を与えた」ということばは、クロス王に語った神のことばとしてイザヤ書45章4節に記されている聖書のことばである。使徒パウロがアテネのアレオパゴスで語った記事は、使徒行伝17章23節以下にあり、その中心となる聖句は、「事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。」(使徒行伝17章27～28節)ということばで、神の働きの普遍性を示している。

ここでクラークが聖書の物語にてらして云おうとしていることを解明するとつぎのようになる。勝海舟はたしかにキリスト者ではなかったが、あたかも神が異教徒であるクロス王を用いて、その約束を成就したように、勝海舟を用いて真理と生命をあらわし、彼もまた死ぬ前に神の栄光にかいまみえるようになった。これは異教徒の間に神が広く働いているということを実証しており、このことが否定されるのであれば神の働きの普遍性についてのべた使徒パウロのアテネのアレオパゴスにおけることばは無意味なものとなるであろうというのである。

9. むすびにかえて

われわれは、勝海舟とキリスト教の関係を探索して、彼の生涯を辿ると共に、彼がその生涯のおりおりに、キリスト教と接触していったプロセスを検証してみた。それは、抽象的なキリスト教の教理の知的な研究を媒介にした

ものでなく、具体的な生きたキリスト教徒との人格的な出会いによって生れた心の触発であった。カッテンデーケの場合は、大海原で生死を共にした生きた人間の接触の中から、彼らの自由の原点を彼らの礼拝の中にみにちがない。それが彼らのうたう詩篇の讚美歌の邦訳にあらわされていったものと思われる。

われわれは、アンナ夫人の信仰に勝海舟が共鳴していたことを学んだが、それも、またキリスト教についての理論ではなく、彼女の素朴なそしてひたむきな日常性のなかにあらわれた生きざまに心打たれたものであり、とりわけ彼女の苦悶の中にも永遠の生命を信じてすべてを委ねた臨終の姿に感銘したものであった。

勝海舟は形式的なことにはこだわらず、直截に物を考え、淡々と動のなかに静をみ、静の中に動をみる人であった。だから彼は、制度的な教会や職業的宗教家にあまり拘泥しなかった。わたしたちは彼がキリスト者と親しい交りを生涯つづけたことを指摘したが、その多くは、平信徒であり、日常性の中に信仰をもって生きる人びとであった。

それらの人びとの交遊を楽しむのみでなく、あるいは請われてあるいは進んで聖書のことばを揮毫した。それらを直ちに、勝海舟の愛誦句ということは出来ない。しかし、少くとも五回にわたって、彼が聖書のことばを揮毫していること、そしてそれらの中にそれぞれ深い意味がこもっていることを何人も否定することは出来ないであろう。

禪と剣とならんでキリスト教が勝海舟の思想の背景に存在していたとするならば、それは互いにどの様にかかわり、どういう性格を形づくっていったのか。これは、さらに探求吟味すべき課題であり、本論がその手がかりの一つを提供するものとなれば幸いである。

注

- 1) 江藤淳、「剣と神とキリスト教」『勝海舟』中央公論、日本の名著32巻、昭和53年20頁。
- 2) 竹中正夫「勝海舟と新島襄」、『同志社時報』No.90、1991年10月、90頁～99頁。
- 3) 司馬遼太郎、『明治という国家』平成元年、234頁。
- 4) 「海舟座談」『勝海舟全集』11巻、草野書房、1975年、116頁。
- 5) カッテンディーケ、『長崎海軍伝習所の日々』、水田信利訳、東洋文庫26、平凡社、1964年、3頁～4頁。
- 6) 同上書、84頁。
- 7) 同上書、62頁。
- 8) 同上書、161頁。
- 9) 同上書、45頁。
- 10) 同上書、39頁～40頁。
- 11) 同上書、49頁。
- 12) 菱本文夫、「勝海舟訳オランダ語賛美歌「ローフ・デン・ヘール」蘭学資料研究会報告、No.246、昭和46年5月15日、以下「研究会報告」と略記す。菱本文夫、「勝海舟と讃美歌——「なにすとして やつれし君ぞ」について」『礼拝と音楽』Vol.18、No.19、1972年9月。
 なお筆者に菱本文夫氏の勝海舟の讃美歌についての業績を紹介されたのは、小出教会牧師、鈴木敏氏、と長岡教会牧師西八条敬洪氏であり、記して両氏の厚意に謝意を表したい。
- 13) 『東洋学芸雑誌』14号、130頁～131頁、菱本文夫、「研究会報告」
- 14) 菱本文夫「研究会報告」
- 15) 『勝海舟全集』14巻、253頁
- 16) 菱本文夫、「勝海舟と讃美歌」、『礼拝と音楽』前掲。
- 17) 『勝海舟全集』12巻、76頁。
- 18) 勝海舟は、ペルス、レイケンを深く尊敬し、彼に従ってオランダ留学を志したほどであった。
- 19) 菱本文夫、「長崎の鐘」『キリスト新聞』1974年4月20日。
- 20) 『勝海舟全集』11巻、68頁。
- 21) 同上書、67頁。
- 22) 同上書、190頁。
- 23) 同上書、378頁～379頁、勝海舟は新島襄との第4回会談のときに、基督教の認可について彼の意見を開陳している。『新島襄全集』5巻、378頁～380頁。
- 24) 勝海舟のキリスト教容認論は植村正久によっても伝えられている。『植村正久とその時代』V巻、2頁
- 25) J.H.シーラー『宗教要論』小崎弘道訳、十字屋、明治14年。
- 26) 『勝海舟全集』21巻、429頁。

- 27) クララ・ホイットニー『クララの明治日記』下巻、昭和51年、227頁。
- 28) 同上書、222頁、262頁、青山墓地における外人墓については、青山学院大学ジョン・クルンメル教授の御教示をいただいた。John W. Krummel, Aoyama Epitaphs, Burial site for foreigners, Japan Times, July 1, 1988. なお、この書と次頁の書の拓本製作にあたっては、青山学院女子短期大学の野村祐之講師の御尽力をいただいた。
- 29) 『クララの明治日記』下巻、262頁。
- 30) この書について筆者に御教示下さったのは、山岸和夫氏で、同氏は写真と共に、この書簡を送って下さった。1993年、7月28日付。その御厚意に深謝したい。
- 31) 勝部真長、『勝海舟』下巻、1992年、390頁、396頁
- 32) 勝部真長、『勝海舟』下巻、480頁。
- 33) 『クララの明治日記』上、87頁～88頁。
- 34) 吉野俊彦、『忘れられた日銀総裁——富田鉄之助、東洋経済社昭和49年、324頁。
- 35) 『新島襄全集』3巻、1987年、646頁～647頁。
- 36) 『国民新聞』明治23年2月4日。
- 37) J.D. デイヴィス『新島襄先生伝』（村田勤、松浦政泰合訳）、明治24年。
- 38) 杉井六郎、「解説 新島襄先生伝」『新島襄先生伝』伝記叢書100、大空社、1992年、3頁～4頁。
- 39) 同上書、4頁。
- 40) 『勝海舟全集』11巻、201頁。
- 41) 徳富蘇峰『我が交遊録』、中央公論社、昭和13年、262頁～263頁。
- 42) 竹中正夫、「本郷教会の人びと」『弓町本郷教会百年史』弓町本郷教会、1986年、297頁、『新人』明治40年5月号。
- 43) 民友社編、『勝海舟』民友社、明治32年、13の木版画挿入。
- 44) 徳富蘇峰、『勝海舟伝』改造社、昭和7年、374頁。
- 45) 山路愛山、『勝海舟』改造社、昭和4年、198頁。
- 46) 戸川残花編、『旧幕府』全五巻四十八冊、臨川書店復刻版、昭和46年。
- 47) 『クララの明治日記』上、130頁。
- 48) 『クララの明治日記』下、228頁。
- 49) 勝部真長、『勝海舟』下巻、489頁～491頁。
- 50) E. Warren Clark, KATZ AWA-The Bismarck of Japan or The Story of A Noble Life, B.F. Buck & Company, 1904, 95頁、本書は静岡県立図書館ならびに同志社大学ケーリ文庫に所蔵されている。
- 51) 同上書、7頁、本書には、高橋邦太郎氏の訳があるが、本稿では拙訳を試みた。
- 52) 同上書、8頁。
- 53) 同上書、9頁。